

パネルディスカッション「持続可能な地域における減災対策のすすめ」

コーディネーター 重川希志依（富士常葉大学環境防災学部教授）

パネリスト 青山 達（滋賀県総合防災課地震対策室長）

大西 賞典（加古川グリーンシティ防災会会長）

菅 磨志保（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任講師）

津村 孝司（安土町長）

中田 全一（近江八幡市岡山公民館長）

「持続可能な地域における減災対策のすすめ」をテーマにパネルディスカッションが行われました。最初に参加されたパネリストの活動状況について紹介がなされた後、その活動のウイークポイントの問題点について論議が深められました。以下に、その概要を紹介します。

1. パネリストの活動状況について

各パネリストから、具体的な活動状態が紹介されました。主な点は次のとおりです。

- ・行政と住民がパートナーとして町づくりを考えるため町づくり協議会を実施、自主防災システムとして自主防災会、地域防災プロジェクト活動を実施、活動にはコミュニティの役割が不可欠であること等。
- ・行政の行う公助には限界があり住民の力が必要、防災訓練の際、実際の避難体験も実施していること、建物の耐震補強に補助を行っていること、自治会等で防災勉強会を実施していること等。
- ・災害ボランティアと地域住民とのかかわりについての具体的事例の紹介。
- ・大規模マンションでの防災活動、防災を語らなくても防災ができるようにすることが重要、防災活動は継続性が重要であること、災害時に行政をあてにしない体制作りについて等。
- ・琵琶湖西岸断層帯の長期評価に対する対応状況、10ヵ年計画の地震防災プログラム、県立施設の耐震化、木造住宅耐震診断の無料化及び耐震改修への補助、行政ができない部分は地域での助け合いに期待等。

2. 活動のウイークポイントについて

次いで、議論を深めるために述べられた活動のウイークポイントが紹介され、それらについて論議が行われました。主な点は次のとおりです。

- ・主力メンバー固定化に伴う次世代受け渡しへの危惧、マンション防災における昼間の防災体制構築の遅れ、行政と自主防災の連携の不足等。
- ・後継者問題はよく言われるが自然発生的に継いでもらえると思っている。他方、種々の市民運動でも最大の難関は後継者と資金といわれるように困難な課題でもある。情報を

共有することにより同じ問題意識を持ってもらえば次世代に繋がっていく、その点からもコミュニティは重要でありその醸成が地域における防災活動となる。以前村だったところなどは地域の結びつきが強い等。

- 行政側の思いと住民の行動が結びついていかないところがある。各地区及び地域の強化のため地域夢づくり事業を展開、一人暮らしのお年寄りや子育て対応、地域の防災力対応等、地域の結びつきのため活用を期待。地域の結びつきは農村部に比べ新興住宅地は弱い点がある等。
- 近江八幡が重要文化景観に認定され脚光を浴びている八幡堀を修復するなど、町づくりの素材は多くある。若い人の興味を引くような素材、お年寄りが賛同するようなテーマを出して行きたい。公民館との交わりを深めるため、子育てサロン等、各種サロンを展開。コミュニティ活動の最前線として若い人たちに場を提供したい等。

3. 会場からの質問について

会場参加者の方からも質問がありました。主なものは次のとおりです。

- 震ヶ関のウイークポイント及びボランティアのウイークポイントについて教えて欲しい。
- 傍から見て、行政が抱えているウイークポイントは災害の全体像が見えていないところ、例えば、死者何千人とか震度やマグニチュードの数字は出てくるがその数字が意味するもの、地震が起きたときの災害の現象展開のどの時点でどういう対策をとらなければ3日後にどのような問題が生じるか等、先を見通した政策立案をする力が不足していると思う。被災者は一週間後、一ヵ月後、一年後に何が必要かは見えるのに体験された貴重な教訓は公の報告書にはない。ウイークポイントとか失敗したことが重要で、その情報を共有する場が必要。そこが一番の弱点と思う。
- これまでの地域コミュニティのお話の中で出てきた課題（次世代育成、行政との連携、資金など）は、全てボランティアにも当てはまる。ただ、弱みは強みにもなる。使える資源が僅かだからこそ工夫が生まれる。震災以降、様々な災害への対応の中から工夫が生まれノウハウとして蓄積されてきた。12年前を考えるとボランティアによる「共助」の仕組みはかなり整備されてきたと思う。

4. その他

最後に、各パネリストの感想が述べられ、まとめにかえて、どのような事業でもみんなのでやることが防災力のアップになる。誰でも主役になれるようなテーマで、みんなが参加でき、だれもが顔見知りになる。防災に必要なのは、いざという時、隣の人を気遣える気持ちをみんなが持つこと、できることからやればよいのではないかとの感想が述べられました。